

南インドにおけるカーラ龍王と その瑞相表現

佛敎大学総合研究所特別研究員

中西 麻一子

はじめに

仏伝文学に記されるカーラ龍王は、苦行を放棄したシッダールタが菩提樹下へ向かう途中に登場する。仏伝の主題としてはカーラ龍王の讚歎説話¹と名付けられ、一般的に草刈人の布施説話²と連続して語られる³。それに対して、紀元後2世紀の南インドでは、カーラ龍王の讚歎説話のみが図像化されるため、ここに文献資料と図像資料との伝承過程に隔たりが見られる。そこで本稿ではまず、南インドに伝承されるカーラ龍王の讚歎図を取り上げ、その表現上の特質を明らかにしたうえで、両資料の相違がいかなる要因で生じたのかを究明する。本来ならば、草刈人の布施説話とその図像表現も併せて取り上げ、両主題を比較して検討すべきではあるが、紙幅の都合上、必要に応じて言及するに留め、稿を改めて論じることにした。

1. 仏伝文学に語られるカーラ龍王の讚歎説話

カーラ龍王の讚歎説話は、初期経典には記述が見られないため、仏伝文学の段階で新しく創出されたものと考えられる⁴。カーラ龍王の讚歎説話の骨子は「シッダールタがもうすぐ成道することを感知したカーラ龍王が、河底から出てきてシッダールタを讚歎する」というものである。本節では、この説話の中で、種々のヴァリエーションが見られるカーラ龍王が感知した成道の瑞相表現

を整理し、確認しておきたい。この瑞相表現は、各文献資料を整理するとおおよそ次の七つが挙げられる。

表1 カーラ龍王の感知した瑞相表現一覧

		瑞相の表現						
		(1) 鉢の逆流	(2) 大地の震動	(3) 鳥の右繞	(4) 菩薩の光明	(5) 清涼な風	(6) 満瓶の右繞	(7) 少女の右繞
文献資料	修行本起經	●	●	●	●			
	太子瑞応本起經	●		●				
	<i>Buddhacarita</i> 仏所行讚		●	●	●	●		
	<i>Asokāvadāna</i> 対応漢訳三種		●		●			
	過去現在因果經		●	●		●		
	<i>Saṅghabhedavastu</i> 根本説一切有部律破僧事		●	●	●	●		
	Nidānakathā (Jātaka 註, 序文)	●						
	普曜經				●			
	<i>Lalitavistara</i> 方廣大莊嚴經		●	●	●	●	●	
	<i>Mahāvastu</i> 15. 觀察經〔前半〕			●	●	●	●	●
	<i>Mahāvastu</i> 18. マーラの最後		●	●	●	●	●	●
	仏本行集經 向菩提樹品中		●	●	●	●	●	●

- (1) 鉢の逆流。または、乳糜の鉢を河へ投げると、逆流して（過去仏の）三鉢の上に重なる（音）。
- (2) 大地の震動や足音。
- (3) 複数の鳥（青鷺・鷺鳥・孔雀など）が右回りに旋回（右繞）する。

- (4) シッダールタ（菩薩）の身体から放たれた光明が龍宮を照らす。
- (5) 清涼な風が吹く。瑞雲が現れる。
- (6) [水の] 満たされた壺が右回りに旋回（右繞）する。
- (7) 少女たちが右回りに旋回（右繞）する。

表1が示すように、各文献が具える基本的な瑞相表現は（2）シッダールタが菩提樹へ向かう歩みで大地が震動したこと、（3）上空で複数の鳥が右周りに旋回したこと、（4）シッダールタの身体から光明が放たれたこと（もしくは、黄金に輝いていたこと）の三つである⁵。また、紀元後1-2世紀のアシュヴァゴーシャの作品『ブッダチャリタ』、紀元後2-3世紀に訳出された『修行本起経』、『太子瑞応本起経』、そして説一切有部律などの北伝資料は（1）～（5）のいずれかの瑞相との組み合わせであるのに対して⁶、『ラリタヴィスタラ』、『マハーヴァストゥ』とそれに対応する漢訳経典には、（6）（7）が付随している⁷。この（6）（7）の瑞相は図像表現を分析する際に重要になるので、『マハーヴァストゥ』「観察経〔前半〕」⁸の当該箇所を次に確認しておきたい。

atha khalu bhikṣavaḥ bodhisatvaṃ taṃ mahāvīkrāntaṃ vikramantaṃ pañca moraśatāni bodhisatvaṃ gacchantāṃ abhipradakṣiṇīkṛtvā anuparivartensuḥ / pañca śataptraśatāni bodhisatvaṃ gacchantāṃ abhipradakṣiṇīkarontā anuparivartensuḥ / pañca kroṃcaśatāni bodhisatvaṃ gacchantāṃ abhipradakṣiṇīkarontā anuvartensuḥ / pañca jīvaṃjīvakaśatāni bodhisatvaṃ gacchantāṃ abhipradakṣiṇīkarontā anuvartensuḥ / pañca vakaśatāni bodhisatvaṃ gacchantāṃ abhipradakṣiṇīkarontā anuvartensuḥ / pañca pūrṇakumbhaśatāni bodhisatvaṃ gacchantāṃ abhipradakṣiṇīkarontā anuvartensuḥ / pañca kumārīśatāni bodhisatvaṃ gacchantāṃ abhipradakṣiṇīkarontā anuparivartensuḥ // atha khalu bhikṣavo bodhisatvasya etad abhūṣi // yathā ca ime pūrvoṭpādā yathā ca pūrvanimitā avyāhatāṃ anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambudhiṣyaṃ //

Mahāvastu (Mvu ii, 264, 15–265, 6)

さて、実に比丘たちよ。かの菩薩が偉大な歩調で歩んでいると、歩んでいる菩薩を五百のクジャク⁹が右繞して追従した¹⁰。歩んでいる菩薩を、五百のキツツギが右繞して追従した。歩んでいる菩薩を、五百のダイシヤクキジ¹¹が右繞して追従した。歩んでいる菩薩を、五百の共命鳥が右繞して追従した。歩んでいる菩薩を、五百のキジが右繞して追従した。歩んでいる菩薩を、五百の満瓶が右繞して追従した。歩んでいる菩薩を、五百の少女が右繞して追従した。その時に、比丘たちよ、菩薩は次のことを思った。「これらの前兆や瑞相にしたがい、私は、間違いなく無上正等菩提を証得するだろう」と。

ここで新しく登場する満瓶 (Skt. *pūrṇakumbha*¹²) は、古代インドの慣習から満瓶の水によって不浄を取り除くという性格を具えており、特に南方上座部所伝の文献資料では、町や道路を清浄にして、飾り立てる際に満瓶を設置するという記述が見られる¹³。この一節では、それらの意味や用途を具える満瓶が瑞相の一つとして現れることに留意しておきたい。また、各仏伝文学によって複数の瑞相が組み合わさることについては、同箇所での過去仏への言及がその手がかりとなる。例えば『過去現在因果経』[T. 3, No. 189, 639c2] では、青雀が右周りに旋回し、瑞雲が現れ、清浄な風が吹いたあと「此の菩薩の瑞相、悉く過去佛に同じ」と記される。つまり、過去仏に倣うという意味付けを用いることで、仏伝を物語るための新たな場面やより華美な表現が仏伝文学の制作者によって為し得たためとも解釈できよう。以上の文献資料の記述を踏まえて、次節では南インドに伝播したカーラ龍王の讚歎図がどのような図像表現を保存しているのかを検討する。

2. 南インドにおけるカーラ龍王の讚歎図

カーラ龍王の讚歎図は、中インド・サーンチー第一塔南門東柱正面第一区画と西門北柱内側面第一区画（紀元後1世紀初）の二例が早期の作例として挙げ

られる¹⁴。サーンチャーの図像表現については、平岡三保子（2020：101-106）によって詳細な分析が行われ、南門の主題は『ニダーナカタター』、西門は『ラリタヴィスタラ』と符合することが指摘されている。本節では、サーンチャーより以南にあるカナガナハリ大塔の作例から順に考察を進める。

2-1. カナガナハリ大塔上段レリーフ石板（紀元後2世紀）

南インド・カナガナハリ大塔の胴部に設置された上段レリーフ石板 No. 10 は、上下の区画に仏伝の二場面を彫り出し、上段にはカーラ龍王の讃歎図、下段にはスジャーターの乳糜供養図が位置する¹⁵。下段区画の下枠に刻まれる碑文には、両仏伝場面に登場する人物名が「村長の娘スジャーターとカーラ龍王 *sujātā gamikaduh [tā kā] (l) o ca nāgarāyā*」と名記されている¹⁶。文献資料



図1 カーラ龍王の讃歎図 カナガナハリ大塔上段レリーフ石板 No. 10（上段区画）

ではカーラ龍王とカーリカ龍王の二通りの名が知られているが¹⁷、南インドではカーラ龍王と伝えられていたことが碑文の銘によって判明した¹⁸。また、サーンチーの二例とカナガナハッリの構図には共通点があり、両図とも台座より低い位置にカーラ龍王を配置している。カナガナハッリでは、右上の台座上に仏足跡を彫り出してシッダールタの存在を暗示し、そのすぐ下には五つの龍蓋を装着するカーラ龍王が合掌讃歎しながら台座を見上げている（図1を参照）。カーラ龍王の下方には、三人の龍女が頭に一つの龍蓋を装着し、同じく合掌した姿で右上の台座へ顔と姿勢を向けている。カーラ龍王と龍女たちを上半身のみで表すことで、シッダールタのいる岸辺まで河から浮上してきたような構図を取っている¹⁹。カナガナハッリは、カーラ龍王が成道間近のシッダールタを讃歎したという説話の骨子のみを伝える表現ではあるものの、同じレリーフ石板の下段区画に位置するスジャーターの乳糜供養図²⁰とサーンチー第一塔南門の同作例について『ニダーナカター』との関連が指摘されていることを考慮すれば、碑文と同じカーラ龍王の名を記す『ニダーナカター』が図像表現の制作背景にあると想定し得よう。

2-2. アマラーヴァティー大塔第二期欄楯柱の作例（紀元後2世紀）

それに対して、同主題が大きく展開するのはアマラーヴァティー大塔の第二期欄楯柱の空隙部の浮彫である。中央の円形区画にスジャーターの乳糜供養図が位置し、その上部にナイランジャンナー河での沐浴図とカーラ龍王の讃歎図が併せて描かれている（図2を参照）。この説話の内容は、「シッダールタがナイランジャンナー河の岸辺で乳糜を食す前に沐浴すると、樹神が手を差し伸べてシッダールタを河から引きあげた²¹」というもので、画面中央に描かれる河の右上には、その樹神の差し出された右手が樹の中に描かれている。そして最下部には、沐浴と食事を済ませたシッダールタがナイランジャンナー河を渡り菩提樹下へ向かう様子を、左岸から右岸へ仏足跡を四回（二歩目と三歩目は左足のみ）描くことで暗示している。仏足跡の上部には、瑞相を示す複数の鳥が右回りに旋回し、河の左岸には、満瓶を両手で持つ女性たちがシッダールタに付き

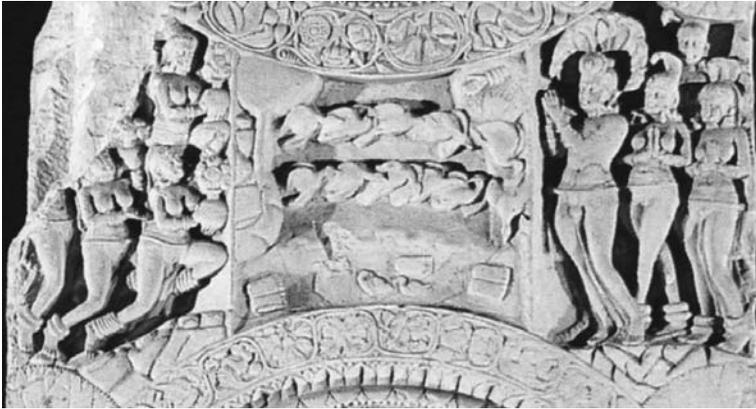


図2 ナイランジャナー河での沐浴図とカーラ龍王の讚歎図 アマラーヴァティー大塔欄楯柱内面（表2-1）

従ってやってきている。対岸（右岸）には、その光景を眺めるカーラ龍王と三人の龍女が、菩提樹下を目指して河を渡るシッダールタを迎え、合掌讚歎している。この瑞相を示す満瓶は、前節で提示した『ラリタヴィスタラ』及び『マハーヴァストゥ』とそれに対応する漢訳經典のみに言及されるため、両文献資料に基づいた表現であることが指摘できよう²²。このような鳥と満瓶の瑞相を含むカーラ龍王の讚歎図は、表2が示すようにアマラーヴァティーに五例、ナーガールジュナコンダに一例が現存する²³。

表2 瑞相表現を含むカーラ龍王の讚歎図作例一覧

	出土地	所在（現所在地）	年代	出典
1	アマラーヴァティー （図2）	ロンドン、大英博物館：BM 4	サータヴァーハナ： 2世紀	Knox. Pl. 6.
2	アマラーヴァティー （図3）	線画（Mackenzie Collection）	サータヴァーハナ： 2世紀	Fergusson. Pl. 67.
3	アマラーヴァティー （図4, 5）	ロンドン、大英博物館：BM 70	サータヴァーハナ： 3世紀	Knox. Pl. 69.
4	アマラーヴァティー	線画	サータヴァーハナ： 3世紀	Burgess. Pl. 34.
5	アマラーヴァティー	線画	サータヴァーハナ： 3世紀	Burgess. Pl. 37- 2.
6	ナーガールジュナコンダ	ナーガールジュナコンダ考古 博物館	イクシヴアーク： 3世紀	全集 13. Pl. 130.



図3 カーラ龍王の讃歎図 アマラーヴァティー大塔欄楯柱（表2-2）

もう一つの紀元後2世紀の作例は、第二期欄楯柱の空隙部左区画に位置する（図3を参照）。蓮弁を施した台座上に仏足跡と火炎柱が直立することで、画面中央に立ち姿のシッタールタが存在することを暗示している²⁴。その左側には瑞相を示す鳥が一羽と満瓶を頭上に掲げて集う女性たち四人がまとめて描き込まれている。右側下方には、カーラ龍王が高く合掌を掲げながら讃歎し、その後ろには、龍女が同じ姿勢をして付き従っている。限られた方形の区画内に瑞相を象徴的に表し、よりまとまりを持たせた構図へと展開していることが分かる。

2-3. アマラーヴァティー大塔基壇部覆板の作例（紀元後3世紀）

南インドで仏像が制作され始める紀元後3世紀の作例は、基壇部覆板に彫り

出されている（図4を参照）。図3と同じ構図を継承しながらも、同主題に独自の変容が見られる。その作例は、仏塔図の基壇正面部に位置し、中央には頭光を具えた仏立像が直立している（図5を参照）。そして、頭光の上空には、瑞相を示す鳥が二羽と、両脇に二人ずつ、頭上に満瓶を載せた女性が浮遊している。カーラ龍王は、右側下方に跪いて合掌讃歎しながら仏立像を見上げている²⁵。さらに注目すべきは、仏立像の真下に跪いて礼拝する二人の供養者が看取されることである。供養者を含んだ構図は、仏立像に焦点が強く置かれるため、カーラ龍王の讃歎説話を表現するという意識が極めて低い。島田（2000：36-38）による論考によれば、アマラーヴァティー大塔の立像の着衣には、通肩と偏袒右肩の二つの形式が併存し、仏伝図中の作例は通肩、礼拝像形式の作例は偏袒右肩で表されるという。この作例の仏立像は、偏袒右肩の着衣形式をとることから、仏塔に安置された仏立像へ礼拝する供養者を交えた礼拝像図と理解し、それにカーラ龍王の讃歎図の要素が組み込まれたものと解すべきであろう。アマラーヴァティー大塔における同主題は、仏伝の一場面のみならず、



図4 仏塔図 アマラーヴァティー大塔基壇部覆板（表2-3）

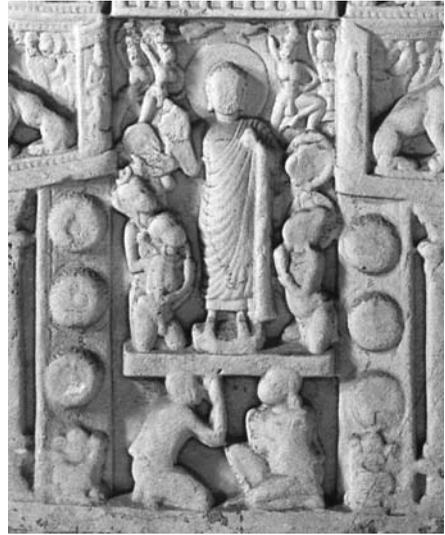


図5 同仏塔図（部分）基壇正面部（表2-3）

後には礼拝像図の情景描写に採用されるほど好まれていたことがうかがえる。

以上のことから、カナガナハリとアマラーヴァティーでは、カーラ龍王の讚歎説話の図像表現に明瞭な表現上の変化が認められた。カナガナハリが同主題を示す基本的な表現であるのに対して、アマラーヴァティーは、『ラリタヴィスタラ』や『マハーヴァストゥ』に対応する瑞相表現を表し、かつその要素を取り入れた礼拝像図へと新たな発展をみせた。次節では、以上の考察を踏まえたうえで、南インドにおける草刈人の布施説話の図像化について検討する。

3. 南インドの仏伝図に表される空の椅子

仏伝文学に語られる草刈人の布施説話は、サーンチー第一塔南門東柱正面第一区画をはじめガンダーラ地域でもカーラ龍王の讚歎説話と同じく成道前の出来事として描出される²⁶。特に、ガンダーラ地域では、小塔（奉獻塔）の円胴部に設置される作例や²⁷、菩提座の準備図（あるいは菩提座につく釈迦図）と題される仏伝図と連続して配列される作例もあり²⁸、むしろ成道前の出来事として重要視されていた傾向にある（図6を参照）。仏伝文学にも同様の傾向が見られ、草の取得は成道するために必要な手順であることが『過去現在因果経』²⁹、『普曜経』³⁰及び『ラリタヴィスタラ』などに述べられる。『ラリタヴィスタラ』では、なぜ草が必要になるのかを以下のように説明している。



図6 草刈人の布施図（右）、菩提座の準備図（左）ガンダーラ地域出土

*atha khalu bhikṣavo bodhisattvasyāitad abhavat. kutra niṣaṅṅais taiḥ pūrvakais
tathāgatair anuttarā samyaksambodhir abhisambuddhā iti. tato 'syāitad abhūt.
tṛṇasamstare niṣaṅṅair iti.*

Lalitavistara, (Lv. 285, 17–19), 外蘊 (2019: 校訂 288, 7–9, 和訳 596, 14–17)

さて、その時、比丘たちよ、菩薩に次のような思いが生じた。「彼ら過去の如来たちは、どのようなところに坐すことで、無上正等覚が得られたのだろうか」と。それから、彼にこのような思いが生じた。「草の座に坐すことで（無上正等覚が得られた）」と。

この後、シッダールタが草刈人スヴァスティカのもとへ行き、草を受け取る場面へと展開する。この一節では、過去の如来たち（過去仏たち）が成道した時に倣うため、草を取得する必要があると説いている。ところが南インドでは、上記の理由でいずれの仏伝文学にも草刈人の布施説話が語られているにもかかわらず、図像化は行われてはいない³¹。本稿で問題とするこの文献資料と図像資料との伝承の隔たりについては、前節で検討したカーラ龍王の讚歎図が南インドでは特に好まれていたという実態と、本節で取り上げる仏伝図中のブッダを暗示する象徴表現に要因があると推察する。すなわち、ガンダーラ地域の降魔成道図や梵天勸請図、四天王奉鉢図などでは、台座上に敷き広げられた草の表現を認めることができるが³²、南インドの降魔図および成道図などでは、空の椅子（あるいは空の御座^{みくら}）が表され、作例によっては、その椅子の座面と背面に草ではなくクッションが彫り出されているのである（図7、8を参照）。この空の椅子は、ブッダを象徴的に表わす南インドに特有のモチーフであり、当時（紀元後2世紀頃）の南インドにおける椅子に座するという慣習が図像表現に反映されていると考えられる。類例としては、アマラーヴァティーのマーンダータ王説話図に描かれる転輪聖王が椅子（玉座）に座る姿で表現されることが挙げられよう³³。つまり南インドでは、地域的な慣習を優先して仏伝図の制作が行われたため、草刈人の布施説話は図像化されなかったと解すこ



図7 降魔図 カナガナハハリ大塔上段レリーフ石板 No. 11/08 (上段区画)

とが出来る。

お わ り に

以上、カーラ龍王讃歎説話と草刈人の布施説話の描写について、文献資料と図像資料の伝承に相違があることを具体的に指摘し、その要因について検討した。第一節と第二節では、カーラ龍王の讃歎説話に記される瑞相表現の整理を行ったうえで、アマラーヴァティーとナーガールジュナコンダの作例が『ラリタヴィスタラ』や『マハーヴァストゥ』の瑞相表現と対応し、それが礼拝像図へと独自に展開することを確認した。次いで第三節では、草刈人の布施図が南インドで不表現であることには、シッダールタの存在が草を必要としない空の椅子によって暗示されるためであることを指摘した。両図像の伝承過程は、文



図8 成道図 アマラーヴァティー大塔伏鉢部覆板（仏伝三相図の下段区画）

献資料に記されることの無い紀元後2世紀の南インドにおける仏教受容の側面を示す貴重な事例として挙げる事ができよう。

参考文献（アルファベット順）

荒牧典俊, D. Dalayan, 中西麻一子

(2011)『大乘佛教起源論のための佛教美術史的基礎研究 研究成果報告書（代表：荒牧典俊）』（科学研究費報告書），龍谷大学仏教文化研究所。

Burgess, James

(1887) *The Buddhist Stupas of Amaravati and Jaggayapeta in the Krishna District, Madras Presidency, Surveyed in 1882* (Archaeological Survey of Southern India 1). London: Trübner, rpt. Varanasi: Indological Book House 1970.

Fergusson, James

(1868) *Tree and Serpent Worship: Illustrations of Mythology and Art in India in the First and Fourth Centuries after Christ, from the Sculptures of the Buddhist Topes at Sanchi and Amaravati*. London: Indian Museum.

平岡三保子

(2020)「サーンチー第一塔南門東柱の仏伝場面－主題・図像・プログラム－」『アジ

ア仏教美術史論集 南アジア I マウリヤ朝～グプタ朝』宮治昭・福山泰子編、中央公論美術出版、pp. 97-125.

平岡聡

(2010) 『ブッダの大いなる物語 下 梵文「マハーヴェストゥ」全訳』大蔵出版.

外菌幸一

(2019) 『ラリタヴィスタラの研究 中巻』大東出版社.

Ingholt, Harald

(1957) *Gandharan Art in Pakistan*, New York : Pantheon Books.

Knox, Robert

(1992) *Amaravati : Buddhist Sculpture from the Great Stūpa*. London : British Museum Press.

肥塚隆

(1979) 『美術に見る釈尊の生涯』平凡社.

肥塚隆・宮治昭(編)

(2000) 『世界美術大全集 東洋編 13 インド (1)』小学館.

栗田功

(2003) 『ガンダーラ美術 I 佛伝 (改訂増補版)』二玄社.

Marshall, Sir John and Alfred Foucher

(1940) *The Monuments of Sāñchī*. 3 vols. London : Probsthain, rpt. Delhi : Swati Publications, 1982.

宮治昭

(2010) 『インド仏教美術史論』中央公論美術出版.

宮治昭(編)

(1997) 『仏伝美術の伝播と変容－シルクロードに沿って－』(シルクロード学研究 3), シルクロード学研究センター.

中川原育子

(1994) 「キジル第 110 窟 (階段窟) の仏伝図について」『密教図像』第 13 号, pp. 19-38.

(1997) 「キジル第 110 窟 (階段窟) の仏伝資料について」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』第 13 号, pp. 91-103.

中西麻一子

(2020 a) 「カナガナハリ大塔におけるスジャーターの乳糜供養について」『アジア仏教美術史論集 南アジア I マウリヤ朝～グプタ朝』宮治昭・福山泰子(編), 中央公論美術出版, pp. 291-322.

(2020 b) 「南インドにおける成道図の図像表現－満瓶を手がかりとして－」『光華女子大学真宗文化研究所年報 真宗文化』第 29 号, pp. 1-16.

Poonacha, K. P.

(2011) *Excavations at Kanaganahalli : (Sannati) Taluk Chitapur, Dist. Gulbarga, Karnataka, MASI No. 106*. Delhi : Chandu Press. (出版年は 2011 年と記載されている)

が、実際に刊行されたのは2013年である)

Schmidt, Klaus T.

- (2010) "Die Entzifferung der westtocharischen Überschriften zu einem Bilderzyklus des Buddhalebens in der „Treppenhöhle“ (Höhle 110) in Qizil." In *From Turfan to Ajanta volume II, Festschrift for Dieter Schlingloff on the Occasion of his Eightieth Birthday*, ed. Eli Franco, and Monika Zin. Bhairahawa, Rupandehi : Lumbini International Research Institute, pp. 835–866.

島田明

- (2000) 「アーンドラ美術の仏陀像－浮彫像に見るその成立と展開－」『仏教芸術』第249号, pp. 13–48.
- (2012) "Formation of Andhran Buddhist Narrative : A Preliminary Survey." In *Buddhist Narrative in Asia and Beyond : In Honour of HRH Princess Chakri Sirindhorn on her Fifty-Fifth Birth Anniversary, Vol. 1*, ed. Peter Skilling and Justin McDaniel. Bangkok : Institute of Thai Studies, pp. 17–34.
- (2013) *Early Buddhist Architecture in Context : The Great Stūpa at Amarāvātī (ca. 300 BCE–300 CE)*. Leiden/Boston : Brill.

Sivaramamurti, Calambur

- (1942) *Amaravati Sculptures in the Madras Government Museum*, Bulletin of the Madras Government Museum, New Series, General Section, IV. Madras : The Director of Stationary and Printing, rpt. Chennai : Thiru S. RANGAMANI, I.A.S. Principal Commissioner of Museums, 1998.

Vogel, J. P.

- (1926) *Indian Serpent-Lore or the Nāgas in Hindu Legend and Art*. London : Arthur Probsthain.

Zin, Monika

- (2012) "Gandhāra & Andhra : Varying Traditions of Narrative Representations (Some observations on the arrangement of scences citing the example of the Bodhisatva crossing the river Nairāñjanā), presented on the International Conference on the Archaeology of Buddhism in Asia, Archaeological Survey of India, New Delhi, Delhi, 17th-19th February, 2012, pp. 1–12.
- (2018) *The Kanaganahalli Stūpa : An Analysis of 60 Massive Slabs Covering the Dome*. New Delhi : Aryan Book International.

略号

BHSD = *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, Vol. 2 : Dictionary*, Edgerton, Franklin. New Haven : Yale University Press, 1953.

Burgess. = Burgess, James see Burgess (1887)

Chn. = Chinese.

Fergusson. = Fergusson, James see Fergusson (1868)

Jā = *Jātaka, together with its Commentary*, ed. V. Fausbøll. 6 vols. London : Trübner, 1877–1896 ; vol. 7 (Index, D. Andersen), 1897, rpt. London : PTS, 1963.

Knox. = Knox, Robert see Knox (1992)

Lv = *Lalitavistara, Leben und Lehre des Śākya-Buddha, Textausgabe mit Varianten, Metren und Wörterverzeichnis*, ed. S. Lefmann. 2 vols. Halle : Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses, 1902–1908, rpt. Tokyo : Meicho-Fukyū-Kai, 1977.

Mvu = *Le Mahāvastu, Texte sanskrit publié pour la première fois et accompagné d'introductions et d'un commentaire*, ed. Émile Senart. 3 vols. Paris : Imprimerie Nationale, 1882–1897, rpt. Tokyo : Meicho-Fukyū-Kai, 1977.

Pā. = Pāli.

PTS = The Pali Text Society, London/Oxford.

Skt. = Sanskrit.

s.v. = *sub verbo* = under the specified word.

T. = *Taishō Shinshū Daizōkyō* 大正新脩大藏經, ed. 高楠順次郎, 渡邊海旭. 100 vols. 東京 : 大正一切経刊行会, 1924–1934.

図版出典一覧

図 1 荒牧・Dalayan・中西 (2011 : 67, Kanaganahalli 10) より部分を拡大した。

図 2 Knox (1992 : Pl. 6)

図 3 Fergusson (1868 : Pl. 67)

図 4 Knox (1992 : Pl. 69)

図 5 Knox (1992 : Pl. 69) より部分を拡大した。

図 6 栗田 (2003 : Fig. 211)

図 7 荒牧・Dalayan・中西 (2011 : 68, Kanaganahalli 11/08) より部分を拡大した。

図 8 肥塚・宮治編 (2000 : 図版 110) より部分を拡大した。

附記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金 (若手研究 : 20K12871) による研究成果の一部である。

註

- 1 カーラ龍王の讚歎説話は、あるいは「カーリカ龍王の讚歎」、「カーリカ龍王の讚偈」とも名付けられている。龍王の名は『ブツダチャリタ』(第12章, 第116詩節 *kāla- bhujagottama-*)、『マハーヴァストゥ』そして『ニダーナカター』(ジャータカ註釈文献、序説)では、カーラ龍王 (*kāla- nāgarājan-*) と記され、それに対して『根本説一切有部律』「破僧事」*Saṅghabhedavastu*、『根本説一切有部律雜事』、『ラリタヴィスタラ』には、カーリカ龍王 (Skt. *kālika- nāgarājan-*, Chn. 伽陵伽、迦利迦竜王) とあり、二通りの名が存在する。本研究では、記述の多いカーラ龍王を使用する。
- 2 草刈人の布施説話は、あるいは「草刈人の奉獻」とも名付けられている。

- 3 カーラ龍王の讃歎説話が草刈人の布施説話よりも先に語られることが多いが、『マハーヴァストゥ』「観察経〔前半〕」と『仏本行集経』「向菩提樹品 中」では、草刈人の布施説話を先行して記す。
- 4 シッダールタの苦行放棄後を説く初期經典に、『マジジマニカーヤ』*Majjhimanikāya* (MN) 第26経「聖求経」*Ariyapariyesanasutta* が挙げられる。シッダールタが苦行を放棄してウルヴェーラーのセーナー村に移動し、その村で成道したことが簡潔に記されているのみで、仏伝文学に語られるようなカーラ龍王や草刈人などが登場する菩提樹下に到るまでの一連の出来事に関する言及はない。
- 5 例外となる『ニダーナカタール』(ジャータカ註釈文献、序文)では、乳糜の鉢が逆流してカーラ龍王の宮殿に至り、過去の三人の仏たちが用いた鉢の下に音をたてて止まったことが記される。*Jātakatthavaṇṇanā, Nidhānakathā* (Jā i, 70, 13–23)
- 6 その他の瑞相表現としては、『根本説一切有部破僧事』では「祥瑞鹿」が現れたことが記される。
- 7 『ラリタヴィスタラ』の瑞相表現は、木々が菩提樹にお辞儀すること、生類が苦悩より開放されたこと、月や太陽の宮殿に雨が降ること、神々や梵天が来集したことなども記されている。外薮(2019:595)を参照した。
- 8 『マハーヴァストゥ』の章題については平岡聡(2010)に準じ、和訳するにあたって参照した。
- 9 BHSD (s.v. *mora*) を参照。
- 10 BHSD (s.v. *anuparivartati, te*) を参照。
- 11 BHSD (s.v. *kromca*) を参照。
- 12 サンスクリット語の *pūrṇakumbha* との対応が考えられるパーリ語の *puṇṇakumbha* は、パーリ聖典中には用例が見られず、*puṇṇaghata* が主に採用されている。
- 13 満瓶は、『ニダーナカタール』の誕生直前に仏母マーヤーが、出産のために故郷デーヴァダハへと向かう道路を整備する箇所や、『ディーバヴァンサ(鳥史)』第6章第64–66詩節で、都や道路を清掃し飾り立てた箇所などに記される。その他の用例については拙稿(2020b)を参照されたい。
- 14 Marshall and Foucher (1940: Pl. 19 c 1, 65 a 2) これまで南門東柱正面第一区画と西門北柱内側面第一区画のレリーフはムチリンダ龍王の護仏図とされてきたが、平岡三保子(2020: 101–106)による現地調査と文献資料に基づいた再検討が行われ、カーラ龍王の讃歎図に比定された。本稿では平岡博士の新比定にしたがう。
- 15 カナガナハハリ大塔のスジャーターの乳糜供養図については、拙稿(2020a: 304–308)を参照されたい。
- 16 碑文部分は左半分が破断していたが、Zin(2018: 46)がその破断部分の断片を繋ぎ合わせることで解読に成功した。本稿もその解読にしたがう。
- 17 文献資料におけるカーラ龍王とカーリカ龍王の両名については、註1を参照されたい。
- 18 カーリカ龍王という名は、キジル石窟第110窟(階梯窟)の銘文に見られ、カーリカ龍王と草刈人スヴァスティカの名がトカラ語で記されている。区画には二つの場面

- があわせて描かれており、中川原（1994：32）、（1997：図30）によって、カーリカ龍王の讃歎と草刈人の布施図であることが解明されている。銘文に関しては Schmidt（2010：851）を参照した。カーリカ龍王の名を『根本説一切有部律』『破僧事』*Saṅgha-bhedavastu*、『根本説一切有部律雜事』、『ラリタヴィスタラ』が記していることを考慮すれば、主に（根本）説一切有部の伝承であったことが分かる。
- 19 カーラ龍王の居場所や住処については、一部の仏伝文学に記述があり『ニダーナカター』では「カーラ龍王の宮殿 *kālanāgarājabhavana*」、『ラリタヴィスタラ』には「カーリカ龍王の宮殿 *kālikasya nāgasya bhanam*」とナイランジャンナー河の河中とされる。
- 20 拙稿（2020 a：308）を参照。
- 21 ナイランジャンナー河での沐浴説話を伝承する文献資料のなかで、乳糜供養の前に沐浴し、樹神が手を差し伸べたことを記す文献資料は、『ブツダチャリタ』（第12章、第108詩節）、『仏所行讚』（T. 4, No. 192, 24 c 5-7）、『過去現在因果経』（T. 3, No. 189, 639 b 4-6）、『太子瑞端本起経』（T. 3, No. 185, 479 a 5-7）、『衆許摩訶帝経』（T. 3, No. 191, 949 b 22-23）、『根本説一切有部破僧事』（T. 24, No. 1450, 122 a 18-23）などが挙げられる。それに対して、乳糜供養後に、沐浴し樹神が手を差し伸べたことを記す文献は、『普曜経』（T. 3, No. 186, 512 a 12-16）、『方広大莊嚴経』（T. 3, 187, 584 a 21-23）、『佛本行集経』（T. 3, No. 190, 772 a 15-24）が挙げられる。沐浴の記述はあるが、樹神について言及されない文献資料は、『ニダーナカター』、『ラリタヴィスタラ』、『マハーヴァストゥ』などがある。
- 22 Zin（2012：8）は、Vogel（1926：97-102）に基づき *Mahāvastu* と付合することを指摘する。
- 23 アマラーヴァティー大塔出土のナイランジャンナー河での沐浴図およびカーラ龍王讃歎図については、Shimada（2012：29）Zin（2012：5-8）を参照した。ナーガールジュナコンダの作例は、ブツダの頭光の円に沿って八羽の鳥が右まわりに旋回している。破断しているものの、左上には二人の女性が頭上に満瓶を載せて浮遊している姿が確認できる。肥塚・宮治編（2000：図版130、作品解説410-411）を参照した。作品解説では、瑞相表現について言及されていない。
- 24 ナインドに特有の火炎柱については、島田（2000：23-24）を参照。
- 25 図5は摩耗が激しく、右下の人物の頭部の丸い彫刻が龍蓋であるかどうか判別が難しい。類例を参照すると Burgess（1887：Pl. 34, Pl. 37-2）の線画に残る同主題から、右下の人物に龍蓋が描かれていることが認められるため、カーラ龍王であると比定した。
- 26 サーンチーの草刈人の布施図については、Marshall and Foucher（1940：Pl. 19 d 3）を参照。
- 27 ガンダーラ地域出土の草刈人の布施図を代表する作例としては、シクリ出土の小塔に設置された十三場面で構成される仏伝図の一場面が挙げられる。栗田（2003：Fig. 207）を参照。
- 28 菩提座の準備図、あるいは菩提座につく釈迦図と題される作例については、宮治

- (2010: 325–326, 357–360) を参照されたい。
- 29 「是に於いて菩薩、則ち自ら思惟す。「過去の諸佛、何を以て座と為し、無上道を成す」即便ち自ら草を以て座と為すを知る」『過去現在因果経』[T. 3, No. 189, 639 c 4–5]
- 30 『普曜経』[T. 3, No. 186, 514 c 12–18]
- 31 宮治編 (1997: 108) の仏伝図作例リスト (I-2: インド: 南インド) には、アマラーヴァティー大塔欄楯柱内面の一区画 (Knox. Pl. 8) に、仏座要求図と融合して草刈人の布施図があるとするが、Shimada (2012) のリストには無く、筆者も同区画に草刈人の布施説話の要素を見出せない。
- 32 ガンダーラ地域出土の降魔成道図、梵天勸請図、四天王奉鉢図の台座に草が敷かれている表現については、栗田 (2003: Figs. 226, 237, 245)、Ingholt (1957: Figs. 66, 68) などを参照した。
- 33 アマラーヴァティーの仏伝図に描かれる椅子については、Sivaramamurti (1942: 135–138, Pl. 12) を参照した。この箇所では、椅子に対応するサンスクリット語の用語を *panyanka*、パーリ語は *pallāṅka* と説明される。また、空の椅子は、アマラーヴァティーのマーンダータ王説話図に描かれる転輪聖王が座る玉座と酷似する。Knox (1992: Pl. 62)、Sivaramamurti (1942: Pl. 33-1)、宮治 (2010: 281–286, 図 II-61, II-62) を参照。南インドでは、転輪聖王の座る玉座に準えた空の椅子をブツダを暗示するモチーフに採用したと考えられる。